

江戸新川酒問屋を訪ねる

東京都中央区新川。ここに「酒類業の守護神」として知られる新川大神宮がある。その「総代」の中心人物が、ともに中堅卸の加島屋・廣岡孝治社長⇨写真右⇨と大星岡村・岡村憲樹会長⇨左⇨だ。江戸期、隆盛を誇った「新川酒問屋」を訪ね、大神宮と例祭、新川締めにも触れよう。



上⇨東京都港振興協会「ミニトリエ」内のジオラマ



江戸時代の

町中が待っていた下り酒

●酒問屋と大神宮 新川大神宮は1625年、慶光院周清上人(けいこういん・しゅせい・しやうにん)のゆいん・しよせい・しやうにん⇨

尼)が徳川2代将軍から江戸の町に屋敷を与えられ、その邸内に設けられた伊勢神宮の遥拝所(遠く離れた所から神仏を拜むために設けられた場)だった。しかし1657

の荷揚げのため、江戸の豪商・河村瑞賢が水路を拓き、「新川」と称した。これは現在の新川1丁目3番から4番の間で亀島川から分岐し、新川公園近くで隅田川に合流し

5年3月に太平洋戦争で社殿を喪失した際、再建を發起したのが酒問屋有志だった。1952年10月17日に現在の新川大神宮が竣工、遷宮された。昨年「再建70周年」の節目の年を迎えた。大神宮を支える敬神会の名簿には酒類企業約130社

5社。これまでは新川に拠点を置く業者で運営してきたが、2016年に「一杯奢るからとお願いして」(廣岡社長)、先々を見据えて新メンバーを迎えた。新メンバーの力を借りた「敬神会」は17年にホームページを開設。18年に境内に棚を設けて二斗樽を飾った。江戸時代は「樽廻船」と呼ばれる専用の船で樽酒を輸送して

年に発生した「明暦の大火」で類焼。その代替地として社殿が造営されたのが現在の新川、旧名・靈岸島だった。隅田川の中州を埋立てた地。各地から船で運ばれる物資

ていた(1948年埋立て)。この新川を利用して灘五郷から運ばれた「下り酒」を売買したのが「下り酒問屋」だ。下り酒は往時には、年間100万樽にも上ったと伝えられる。下り酒問屋は次第に新川兩岸に構えるようになり、大神宮を中心に酒類の一大市場(いちば)となった。現在も新川周辺には酒問屋が多くあり、その酒問屋が篤く信仰してきたのが新川大神宮だ。

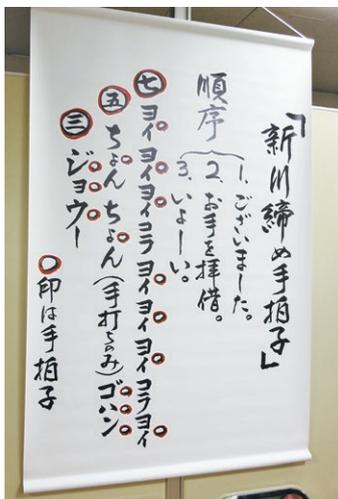
める廣岡孝治社長。「毎日掃除して樽を替え、賽銭を回収している。先代(故廣岡章三郎氏)が毎日足を運ぶ背中を見ていた。お参りの人は結構多いんですよ。みんな悩みがあるんでしょう、ケガしたから早く治りますようにとか」と笑う。大神宮は富岡八幡宮の「出先」に当たり、八幡宮総代としての務めもこなすという。総代は同社のほか大星岡村、升喜(中央区日本橋)、小泉商店(台東区)、升本総本店(新宿区)の

●再建70周年 1948年(50面に続く)



を込めて慰労する。神社の祭りは地元業者を使うものだから、私の幼馴染の焼鳥屋で。私は焼き鳥は苦手ですが、いい料理を出してくれる」

昔は参加数十人程度。一時は新川大神宮と東京都御売酒販組合が交替で主催していたが、2005年から組合主催に固定した。岡村会長は「参加人数が減りかけ、おそろく廣岡先輩(章三郎氏)が働きかけた。卸の廃業や合併が進んだ頃で、将来を考えたのではないかと話す。組合主催となったことで重要性が増し、大規模な会が継続することにいった。



新川大神宮。例祭後の直来で行われる「新川締め」は盃の酒を飲み干す2人の生きが合わなければ罰盃。酒類卸・加島屋の廣岡章三郎さんは新川締めを目を光らせていた

張ったテントで直会を行っていた。廣岡社長らが参加するようになったのは、大神宮の隣に「東京都酒販フーズ健康保険組合会館」ができてからだ。

現在の直会
は午後1時までだが「昔は12時

大神宮例祭と直来を継承

前に例祭が終わり、夕方近くまで延々と飲んでいった。まだ世の中がゆったりしていたから。岡村会長も「その日は仕事なんてできなくなるから、

まるまる予定を空けておいた。すぐ酒に強い人が後輩に両肩を支えられて帰るくらい、飲み続けたいもの」と笑う。「鉢洗いまでが例祭」

と話す廣岡社長。鉢洗いは、例祭や直会の片付けを手伝う人のための「打ち上げ」のようなもの。「敬神会の社員に手伝わってもらうので、感謝

た時の神頼み。この業界は、しょっちゅう困っているからね。でもビールも清酒もと業界人が集まることってあまりない。貴重な機会」と話す。

●新川締め 直来で行われる「新川締め」は、手締めの一種で、

「新川締め」は、手締めの一種で、新川の初売りや商談成立時に、江戸期から行われてきた。そのリズムから、別名を「七・五・三締め」と呼ぶ。

「新川締め」は、手締めの一種で、新川の初売りや商談成立時に、江戸期から行われてきた。そのリズムから、別名を「七・五・三締め」と呼ぶ。

「新川締め」は、手締めの一種で、新川の初売りや商談成立時に、江戸期から行われてきた。そのリズムから、別名を「七・五・三締め」と呼ぶ。

「新川締め」は、手締めの一種で、新川の初売りや商談成立時に、江戸期から行われてきた。そのリズムから、別名を「七・五・三締め」と呼ぶ。

「新川締め」は、手締めの一種で、新川の初売りや商談成立時に、江戸期から行われてきた。そのリズムから、別名を「七・五・三締め」と呼ぶ。

その象徴が、新川大神宮の例祭や運営だと思える。廣岡さんには大変な仕事をやって頂いている。積み上げてくれた先人がいる。それを無にしてはいけない。思いを引き継ぎ、続けていくには総代の役目が大事だ。これから次の代を迎えたりできればいい。(談)

ともいう。売り手役と買手役の2人の朱盃に酒が注がれ、「ごいまして」の発声に続けて周囲はヨイ・ヨイ・ヨイ・コラと手を打つ。このリズムに合わせて2人が酒に口をつけ、最後の「ご繁盛」の掛け声に合わせ、飲み干す。

新川締めを支える「名人」がいた。「板橋の森田哲夫さん(酒類卸・森田商店、廃業)の音頭がすばりしかった。おでこから出てるような甲高くて調子のいい声。森田さんが発声してくださると、引き締まった」と岡村会長は懐かしむ。

御神酒を飲み干す役は、参加者が順に行う。2人のタイミング合わなかったり、酒がこぼれてしまったりすると「罰杯」で、再挑戦。「昔は『まだの人』と声をかけたらみずから出てきた。最近では司会と目を合わせない



荷揚げの様子



「惣一番」の到着を知らせて回る



下り酒の振る舞い酒

ように下を向いちゃう」と廣岡社長は笑う。独特のリズムは慣れないと、飲み干すタイミングを合わせにくい。ただ、こんな話が。「先代は最近の新川締めは速い。もつとゆっくり、手を捨てる

ようにして叩くんだった」と言っていたと廣岡社長。「廣岡大先輩が途中で手を打つのを止めるから、どうしたのかと尋ねると『こんなの新川締めじゃねえよ』と言われた」と

岡村会長。70周年の際には総代が並んで披露した。「意識してゆっくりやったら、バラバラになっちゃったね」

「正調」新川締めを知ってもらい、後世に残そうと、DVDを制作したのは13年のこと。在庫はもうないが、現在は「酒問屋の伝承・新川締め(3部構成)」がYouTubeで無料視聴できる。

「例祭は神事に始まり、鉢洗いに終わる。先人から引き継いだものを守り、さらに続けていけるように取り組んでいく」

江戸の酒販売事情と用語

日本酒類販売に大星岡村、加島屋、ぬ利彦といった流通業者に、灘をはじめ各地の清酒メーカーの東京支店が軒を連ねる中央区新川。この新川が酒類業の中心地として大いに栄えたのが江戸時代。活気あふれる商売の様子を、東京都港湾振興協会の東京臨海部広報展

一室「TOKYOミナトリエ」(江東区青海・青海フロンティアビル20階)内の「江戸デッキ」シオラマから切り取り、紐解いた。

●下り酒 灘や伏見から江戸に運ばれ、江戸で飲まれた酒のこと。生産者から委託され、仲買人として小売人に販売を行って

いたのが「下り酒問屋」。江戸に運ばれない商品は「下らない」もの。くだらない、の語源だ。

●樽廻船 大坂から江戸に樽酒を運んだ船。当初は「菱垣廻船」が使われていたが、享保年間頃から、次第に酒の輸送は「樽廻船」に移行する。

●荷揚げ 品川沖に船が着くと「伝馬船(樽廻船から積み換えられた小型の船)で新川酒問屋に連絡が来る。樽酒は「解(は)しけ」を使って河岸を通じて江戸市中の隅々に運ばれた。写真上。

●惣一番 数隻が同時に大坂を出港し、江戸到着を競った。これが「新酒番船」だ。最も早く到着した船に与えられたのが「惣一番」(1着)の称号で、船頭らが市中を賑やかに練り歩いた。写真中。惣一番は1年間、特別な待遇を受けた。

●配り酒 問屋に届き蔵に入った酒を市中の酒屋に少しずつ配ること。青い旗を立てた手押し車に積まれた。いわゆる小売店サービスだった。

◇◇
【参考資料】岡村亀屋(大星岡村創業者)著「東京新川の今昔」/中央区観光協会公式サイト。